三

仁吉は六間堀に猪牙舟を待たせていた。二人が乗ると船頭が、

「雪がひどくなった。仁吉さん、破れ笠がある、被っていると違うぜ」

と二人に菅笠を貸してくれた。

磐音と仁吉は菅笠を被って猪牙舟に座った。

春の雪だ。水を含んでぼってりしていた。

六間堀から竪川へ抜けてさらに大川へと進んだ。すると大川の上をぼた雪が風に乱れて舞っていた。

船頭は鼻歌を歌いながら、両国橋からお米蔵を横に見て漕ぎ上がる。一合ほど飲んだ酒など寒さに吹っ飛んでいた。

御厩河岸の渡し場を見て、猪牙舟は進み、吾妻橋したで止まった。

「坂崎様、ここから歩きになります」

そう言った仁吉が菅笠を脱ごうとすると、

「笠に積もった雪を流れに落とすことはあるめえ。被っていきなせえ」

と船頭が二人に笠をくれた。

「助かるぜ」

吾妻橋下の船着場にも一寸ほど雪が降り積もっていた。河岸に上がると白一色の浅草広小路がいつもより広く見えた。

磐音は仁吉の案内で広小路を西に上がり、田原町の鉤の手で左に、さらに崇福寺の右に折れて、新寺町通りに出た。通りは下谷車坂にぶつかり、仁吉は右に折れた。

二人は人の往来も絶えた寺町を、雪を踏んでひたすら進む。すると東比叡山寛永寺の時鐘が四つを打った。

磐音はすでに行き先の見当がついていた。

奈緒が乗り込む吉原の大籬丁子屋の寮は根岸にあると聞いていた。となれば、根岸の里ではあるまいか。

仁吉の足は下谷車坂を北へ下って、御切手町から阪本町を進んだ。

雪は激しくもならず、かといって止む様子もなく、夜空に舞うように降り続いていた。

下谷金杉町界隈で仁吉の足は左に折れた。すると冷気が一段と冷えたようだ。東比叡山寺領の寺が見えなくなると金杉村に入り、光も家並みも消えた。

江戸の文人墨客や通人が愛した根岸の里は上野の山陰にあたり、呉竹の里とか、時雨岡などと鄙びた呼び名を持っていた。

仁吉は磐音を西蔵院の北側、竹やぶと梅林に囲まれた百姓家に連れて行き、

「四郎兵衛様がおられます」

と言った。

「仁吉どの、丁子屋の御寮はどれか」

「へえ、この家の裏手にございます」

と梅林の向こう、雪の間から黒々と見える屋敷を指した」

磐音はあの屋根の下に奈緒がいるのかと足を止めて感慨深げに見た。

豊後関前からの長い旅路の果てに奈緒の陰を確かに掴まえたのが、磐音が暮らす江戸であったとは、なんという皮肉か。

旅の間に、磐音と奈緒の間を分かつ谷は奈緒のように深く、広くなっていた。そして、もはや手の届かぬ世界で舞台に上がろうとしていた。

（奈緒、それがしはそなたの影、そなたを見守りながら生きるぞ）

改めて胸のうちに言い聞かせた磐音は、百姓家の裏戸の前に立った。

二人は菅笠を脱ぎ、体に積もった雪を払って戸を開けた。すると中から暖気が顔に吹き付けた。広い土間の向こうの板の間に囲炉裏が切られて、火が赤々と燃えていた。そして、そこに四郎兵衛と会所の手代衆が控えていた。

「おおっ、来られたか。あいにくの雪になりましたな。ささっ、こちらで体を温めてくだされ」

四郎兵衛に誘われるまま、囲炉裏端に座した。すると手代の竹造が鉄瓶から茶碗に湯を注いで、磐音に渡してくれた。

「これは相済まぬ」

湯気が立つ茶碗に口をつけると酒の匂いがした。それは白湯ではなく燗をつけた酒だった。

「これはなにより」

磐音は呟くとゆっくりと熱燗の酒を口に含み、喉へと落とした。

「人心地つきました」

「今宵のうちに尾張の連中が動きそうだと見張りの連中が言うのでな、お呼びしましたのじゃ」

四郎兵衛はいつもどおりの口調だが顔は厳しかった。

町奉行所から吉原の自治を黙認された吉原会所だが、その行動は吉原五丁の郭内で許されたものだ。遊里の外での行動は、黙認外だ。だが、吉原でも大見世の丁子屋の危難に、

「吉原の外では動きませぬ」

では、吉原会所の面目はない。

「尾張の連中は馬喰町の旅籠に分散して止まってましてな。われらも御城近くで騒ぎは起こしたくございません。そこで根岸で引き付けて言い聞かせようかと、吉原の外に出張ってきましたのさ」

「相手は何人にございますか」

「尾張宮宿の女郎屋の番頭、弥平に率いられた配下の数は十四人にございます。うち諸国回遊の剣術家の伊勢崎図書之助とその仲間が四人、さらに宮宿の遊里を仕切るやくざ者の熱田の勘蔵とその手下が八人、頭分の弥平をいれて都合十五人の面々にございます。まずは伊勢崎が手だれかと思われます」

「尾張から大勢で押し出してきたものですね」

「よほど腹に据えかねたか、吉原に遺恨を持ってのことか分かりませぬ。が、吉原も丁子屋も迷惑なことにございますよ」

宮宿の怒りは本来、尾張と江戸の二股をかけた京の朝霧楼に向けられるべきものだ。それが奈緒を追って江戸に来ていた。

「女を見る目に長けた妓楼の主どもの気持ちを、奈緒様が捉えたということでございますよ」

四郎兵衛が言い、煙管をてにして黙りこんだ。

時がゆるゆると流れていく。

囲炉裏の火が燃え盛るのを見ながら、磐音は頭裏に浮かぶなおの顔を必死で追い払っていた。

戸口がふいに開いた。

頭を綿帽子にした若い衆が入ってきて、

「四郎兵衛様、時雨岡不動に三々五々集まって参りました。人数を揃えて丁子屋の寮に踏み込む気配です」

と報告した。

「よし」

と一声上げた四郎兵衛が手代たちを見回し、

「まずは私が掛け合う。動くのは私が許したときのみだ、よいな」

と念を押した。

竹造たちが吉原会所の長半纏の身繕いをし、土間に用意していた六尺ほどの青竹を手にした。

四郎兵衛は郭の外での集団での闘争を避けようとしていた。ましてや長脇差などを用意しての争いは、表沙汰になったときに吉原の存亡そのものに関わることになる。そこで根岸で切り取った青竹をただひとつの護身用の武器に選んだのだ。

吉原会所と書かれた傘をてにした四郎兵衛が言った。

「坂崎様、お願い申します」

磐音は黙って頷くと船頭から貰った破られた菅笠を被り、顎紐を結んだ。

時雨岡不動は、丁子屋の寮の北側に位置し、弘法、頼義、頼朝、文覚の伝承諸説あって定かではない。根岸の里の侘び住まいの一景として江戸十八松の一つに数えられる老松が、不動堂のかたわらに聳えていた。

雪を被った松を囲むように野良道が通っていた。

不動堂の中から明かりが洩れてきた。

傘を差し掛けた四郎兵衛は、堂の前に歩み寄った。従うのは磐音だけだ。

「尾張宮宿の方がに申し上げる」

堂宇の中にざわめきが起こり、緊張にピーンと包まれた沈黙が暫く支配された。

「吉原会所の四郎兵衛にございますよ」

穏やかな呼びかけに堂の扉が静かに開いた。

そして、旅仕度の腰に長脇差を差し込んだ中年の男が立った。

「弥平さんですかな」

「ちろちろと嗅ぎ回る鼠がおると思うたが、吉原の番犬か」

「これはご挨拶にございますな」

とあくまで静かな口調の四郎兵衛が、

「弥平さん、奈緒のことなれば、すでに京の朝霧楼との間に証文んを交わして売り買いができておりますのじゃ。そなたもこの世界の人なれば、証文大事の理は、分かってもらえよう。済まぬがこのまま尾張に戻ってはいただけぬかな」

「四郎兵衛だか五郎兵衛だか知らねえが、あの女を先に買ったのは、尾張の宮宿が先だ。それを江戸に持って行かれちゃあ、熱田大神の日本武尊様に申し訳が立たねえ。なにがなんでも、あの女の首に縄をかけてでも東海道を尾張まで引きずっていくぜ」

「乱暴な話ですな、弥平さん」

「四郎兵衛、おめえがどうしても邪魔をするというなら、丁子屋の寮に打ち込んで、女の顔を滅多斬りにするまでよ」

「どうしても腕ずくとおっしゃるので」

「おおっ、二言はねえ」

「となりますれば、吉原も四郎兵衛会所の面目にかけて、阻止せねばなりませぬ」

談判は決裂した。

「伊勢崎先生」

弥平が堂宇の中に呼びかけた。すると堂の中の鎮まった空気を揺らすように大きな影が立ち、弥平のかたわらに立った。

身の丈六尺、胸板が広く厚い偉丈夫だ。すでに革帯で襷がけにして、眉間には白鉢巻を巻いていた。眉が濃く、太かった。目鼻立ちも大きく、堂々とした風貌だ。

「そっちは二本差しが一人のようだな。うちは天心独名流の伊勢崎先生を初め、五人の剣術家が顔を揃えているんだ。青竹で斬り合うなんてふてえ了見だぜ」

伊勢崎図書之助が堂の回廊から雪の上に飛び下りた。すると堂から四人の剣客たちが姿を見せて、伊勢崎の後方に並んだ。

「坂崎様、致し方ございませぬ」

と四郎兵衛が磐音を振り見て、下がった。

「弥平どのに申し上げる。宮宿と吉原が争って高笑いをするのは、京の島原だけにございます。この場の決着は、それがしと伊勢崎図書之助どのとの勝負で付けさせていただけませぬか。それがしが敗れるようならば、吉原は女を尾張に渡す。また反対に伊勢崎どのが負けたときには、潔く尾張に引き上げる。このこといかがにございますか、四郎兵衛様」

磐音は背後の四郎兵衛に訊いた。

四郎兵衛の返答は即座に戻ってこなかった。

「いかに」

「四郎兵衛の命、そなたに預けます」

磐音は弥平を見た。すると弥平が伊勢崎の判断に委ねるかのように、

「先生」

と呼びかけた。

「弥平、任せよ」

それで伊勢崎圖書之助と坂崎磐音の一対一の勝負になった。

磐音は雪で湿った羽織を脱いだ。

伊勢崎はすでに仕度を終えていた。

「そのほうら、下がっておれ」

伊勢崎は配下の者に命じた。

四人が堂宇の庇の下まで下がった。

二人は一件の間合いで対峙した。

「直心影流坂崎磐音にござる」

「伊勢崎圖書之助」

とだけ名乗った伊勢崎の相貌は雪のせいか、青白く沈んでいた。

剣を抜いて正眼に構えた伊勢崎の挙動は並々ならぬ腕を示していた。

死力を尽くしてどちらかが斃れる。

（生か死か）

とは二つに一つしかなかった。

磐音も備前包平二尺七寸を抜くと正眼にとった。

相正眼のまま、互いの意中を読み合った。

が、舞うように散る雪が互いの双眸の動きを見づらくしていた。

二人は五感と修羅の場で会得した第六感にすべてを託して、仕掛けの間を察知しようとした。

磐音は伊勢崎の太い眉に湿った雪が積もるのを見ていた。

磐音の視線を船頭がくれた破れ傘が防いでいた。

剣を持つ手が冷たく、凍てついてきた。

これは五分と五分。

どちらが焦れて仕掛けるか。

重苦しい戦いの機運が時雨岡不動を支配していた。

伊勢崎圖書之助も磐音の腕を察知したか、先に仕掛けることをsてていた。

一陣の風が雪を舞わせ、その風が御行松の枝に降り積もった雪を、

どさり

と落とした。

その直後、伊勢崎が走った。

正眼の剣が肩口に引き付けられ、伸ばされた。

磐音も動いた。

袈裟に落とされてきた伊勢崎の豪壮な刃の打ち込みに、包平の刃を擦り合わせて柔らかく弾いた。

伊勢崎は磐音の傍らを走りぬけながら弾かれた剣を片手斬りに回して、磐音の背に送った。

磐音は変幻自在な連鎖の剣を背に感じながら、間合いの外に必死で逃れて反転した。

反転したとき、磐音の剣は正眼に戻されていた。

伊勢崎もくるりと体を回した。そして、ゆっくり片手斬りをした剣を正眼に戻した。

再び両者は相正眼で見合った。

伊勢崎の眉から湿った雪が振り払われ、雫が大きな瞼に落ち込もうとしていた。

伊勢崎はふいに上段に剣を移すと、

「死んでもらう」

と呟いた。

再び旋風が雪を蹴立てた。

上段の剣が雪を割って落ちてきた。

磐音は不動の姿勢で、わずかに腰を沈ませて正眼の包平を胸前に引き寄せて待ち受けた」

「とうりゃ！」

伊勢崎圖書之助の腹から叫びが発せられた。

磐音は伊勢崎の巨体の接近を感じつつ、沈ませた姿勢を伸び上がらせ、宗本に引き付けた包平を相手の喉首に向けて放った。

伊勢崎の雪崩れ落ちる上段からの刃は、寸毫磐音に届かなかった。

湿った雪の雫が瞼に入り、間合いを狂わせていた。

包平の切っ先が、

ぱあっ

と雪の根岸の里に血の花を咲かせた。

くうっ

という声を喉で鳴らした伊勢崎が一、二歩よろめき歩いた末にごろりと倒れた。

磐音は、背後で倒れた伊勢崎圖書之助をみようともせず、時雨岡不動の庇の下に立つ弥平に言い放った。

「遊女奈緒に危害を加えんとする者は、この場で申し出よ。それがしがお相手いたす」

鬼人の形相で睨まれた弥平が、

ごくり

と息を呑んだ。

「弥平さん、お分かりじゃな。宮宿の怒りは京の島原に向けられるもの。吉原ではちと理不尽ですぞ」

四郎兵衛が言い放った。

「く、くそっ」

「弥平さん、この足で尾張に立ちなされ。伊勢崎圖書之助の亡骸、われらが手厚く葬るでな」

弥平がすたすたと階段を降り、

「四郎兵衛、今宵は吉原に花を持たせてやる。だがな、これで終わったと思うなよ」

と捨て台詞を残して、時雨岡不動を出て行き、その後に四人の剣客ややぐさたちが従った。

「竹造、弥平さんが変心されてもかなわぬ。江戸を出るまで見届けよ」

と命じた。